



学会出張という名の 欧州ドライブ探訪

がん研有明病院 副院長・消化器センター長 佐野 武



仕事に夢中で、充実した毎日に満足していると信じていたころ、ある座談会で「趣味は？」と聞かれて、即答できない自分に驚いた。昔は多趣味を自負していたのに、いつの間にか仕事だけの人生になってしまっていたらしい。いろいろ考えた挙げ句、「海外旅行が趣味」と答えた自分にも驚いた。そうであればいいのに、という思いが口をついて出てしまったようだ。

私は胃癌を専門とする外科医であるが、国立がんセンターに勤務した16年間に培ったいろいろな国の外科医たちとのネットワークのおかげで、しばしば海外から招聘を受けて出張する。胃癌手術に関する講演をしたり、ライブ手術を行ったり、この二十数年間せせと出かけて、気が付くと38カ国、92都市を訪れていた。初めて出かける街では、せっかくなので時間を見つけては名所を訪ねることにしている。「趣味」の海外旅行である。

旅は非日常であり、どこに行ってもそれなりに楽しいのだが、私は特に欧州が好きだ。30年前にフランスに留学して、自分なりに欧州の旅のスタイルができた。そ

れを今でも踏襲している。一言でいうなら「ミシュランガイドと車の旅」である。

フランス留学中はパリに住み、中古のルノーを買って週末のたびに妻と3歳の娘を連れてあちこちドライブした。どこに行くかは「緑ミシュラン」の勧めに従い、どこに泊まって何を食べるかは「赤ミシュラン」で決めた。この勧めに従う限り、がっかりすることはまずない。もちろんGPSなどない時代で、ミシュラン道路地図をにらみながら路程を暗記し、地図の読めない妻を助手席に置いてひたすら記憶をたどりながら運転した。

ミシュランガイドは極めて有用である。東京版の赤ミシュランが2008年にレストランガイドとして発表されてわが国でも一躍有名になったが、本家本元の欧州版赤ミシュランは目的も内容もまったく異なる。フランスのタイヤ会社であるミシュランが発行するガイドブックなので、まず基本的に車での旅行に役立つようにできている。ABC順にリストされた都市・街ごとに、駐車場や一方通行の情報を含む市街地の正確な道路地図と、お勧めのホテルとレストラン

の情報が掲載されている。旅行者に必要な情報を徹底的に簡略化して詰め込むという点では究極の技術であり、いつも感心させられる。目的地を決めずにドライブ旅行に出かけても、これ1冊あれば何日でも快適な旅ができるのである。

一方、緑ミシュランは訪ねるべき観光ポイントが詳しく記述されている。歴史的意義や景観の美しさなどを基準に、レストラン同様、星の数でランク付けされており、この判断基準には定評がある。初めての国や地域を旅するときには、ミシュランが三つ星・二つ星を付けたポイントを中心に旅程を練る。

留学でパリに住むにあたりフランスの自動車運転免許を取得した。日本の免許証の法定翻訳を用意し、滞在許可証などの書類を添えてパリの警察署に提出すると、日本の免許証と引き換えに濃いピンク色のフランス運転免許証がもらえる。帰国に際してこれを返納すると日本の免許証を返してもらえ、という仕組みである。しかし実は、返納しないという手もある。フランスの免許証を持ったまま帰国し、日本の免許証は再発行を受けるのである。フランスの運

転免許は日本のような更新が必要ないので、法律が変わらない限り生涯有効である。今も私の手元には30年前の写真を貼ったピンクの免許証があり、少なくとも欧州ではこれが通用する。

日本の免許証再発行の手続きは簡単であった。運転免許試験場に行き紛失届を出すのだが、紛失の状況を聞かれたので、「フランスの警察署に預けたまま返納手続きが完了できずに帰国してしまった、もしかすると廃棄されてしまったかもしれない」と説明すると、「そりゃ大変でしたね」と同情されて、すぐに再発行を受けることができた。最近フランスの運転免許もICチップを埋め込んだカード型のものに変わり更新が必要になったとの噂があるが、それでも更新は15年に1度だそうで、2033年までは今のものが使えるらしい。もうそのころは私も欧州でレンタカーを運転することはあるまい。

さて、学会に招聘されて欧州のどこかの都市に出かけることが決まったとする。多くの場合、講演の日時に合わせて最小限の日程を組むのだが（近年はたいてい2泊4日）、年に1度か2度、学会に合わせて数日分の年休を取り、妻を連れて旅をする。まずはその国・地域の緑ミシュラン（多くはすでにわが家の本棚に並んでいる）と最新版の赤ミシュランを手に入れる。学会講演の日時と、日本を出発できそうな日、必ず帰って来なければならない日を勘案して日程を決め、航空券を手配する。次に緑ミシュランで、ここははずせないという場所を確認しながらドラ

イブコースを考える。訪ねるべき名所旧跡や景勝地が分散していると、その取捨選択、コース取りに何日も頭を悩ませることになる。これにさらにホテルの要素が加わるから複雑である。大きな都市のホテルをどれにするかはまあどうでもよいのだが、車でないと行けない人里離れた田園・丘陵地帯に大変魅力的なホテルレストランがあるのも欧州の特徴である。赤ミシュランで、赤い館マークのホテル（非常に快適であることを示す）に星付きのレストランがあったりすると、これを黙って見過ごすわけにはいなくなり、ここに泊まるために旅程を変更することさえある。まず裏切られることはない。広大なブドウ畑を見渡す庭で夕日を眺めながらシャンパンを1杯などというのは、非日常の極みである。いろいろと想像を働かせながら旅程を練るのは、それ自身が旅の楽しみの一つである。

ホテルの予約は、Booking.comなどの予約専用サイトを使うことが増えた。以前はホテルにリクエストのメールを送って返事を待つ必要があったが、予約専用サイトでは空室が確認できて宿泊予約も直ちに完了するので便利である。旅行期間中のすべてのホテルと、特別なレストランの予約をきちんと確定して、初めて旅の計画が完成する。

次は車の予約である。欧州のレンタカーは、なぜかマニュアル車が圧倒的に多く、オートマチック車は車種と数が限定されるので、早めに予約する必要がある。外国で初めての道を運転するのに慣れないマニュアル車では危ない。ま

たGPSは必須である。これなしにドライブしていた時代へはもう決して戻れない。GPSの音声案内には日本語を選択できるものもあるが「0.3マイル先をわずかに右方向です」などと言われてもどのくらい先にあるのか見当がつかないので、慣れるまでしばらく走り回る必要がある（ちなみに英国以外の欧州ではメートル表示なのだが、米国製のGPSでは500メートルを0.3マイルなどと表現する）。

こうしてすべての準備が整うころには、もうなんだか旅が半分終わったような気がすることもある。ネット上で多くの情報が手に入り、多数の写真を見ているのでなおさらだ。しかしどんなに予習をしたところで、やはり初めての場所は新鮮で驚かされる。どんなきれいな写真やビデオを見ても、その空間に立ってみなければ分からないディメンジョンというものがあるのだ。旅はやめられない。

